

## 植田先生を送る

著者	山口 智
雑誌名	神戸外大論叢
巻	73
号	2
ページ	11-12
発行年	2021-04-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002384/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002384/</a>



## 植田先生を送る

山口 智

植田淳先生は京都大学法学部で国際政治学者の高坂正堯氏の教えを受け、卒業後にいったんは信託銀行に就職された。当時について、「調査部を希望しても、営業ばかりやらされた」と苦笑されたことがある。進取の気性に富む者を調査部に置くのはやはり宝の持ち腐れであり、人事は見るべきところを見たのだと思う。とは言え、この述懐が示す通り、先生は学問に対する思いを断ち難く、行内での研修制度を利用してケンブリッジ大学に留学したことを契機に、大学の世界に戻ることを決意された。社会人経験を経た教員は本学では珍しくないが、このような経歴は、大学人としての先生に幅広さと奥行きをもたらしたと言えよう。

商業英語及び専攻英語を担当する教員として本学に採用された先生は、長らく両科目を担当された。商業英語については、2014年に外大で国際ビジネスコミュニケーション学会(第74回全国大会)が開催された際には開催校理事・実行委員長を務めてもいる。本学での開催は、1951年(当時の名称は日本商業英語学会)以来63年ぶりのことであり、先生は、語学と専門の「車の両輪」を目指した外大の歴史の一齣に立ち会う幸運を得たわけである。

また、銀行員としての経験と留学以来のイギリス信託法研究を梃子に、英米法や国際取引法の講義を手掛けられ、専任教員の転出という事情もあって、民法まで担当するという多彩な活躍を示された。「ワーカホリックだから」と口にされたこともあったが、その背後には、本学学生に対する思い入れと、自らの能力に対する強い自負があったように思える。

外国語大学での法学教育は難しい。法律学への志向や素養を期待できない者を前提にして行わなければならないからである。法律系の多様な3科目について自ら教科書を執筆して、それぞれの領域の概要を平易に、しかも大部にわたり過ぎないようにまとめるという容易でないことをなされたのも、学生に対する温かな心遣いの顕われであった。毎年多くの学生が先生のゼミを希望したのは、当然の結果と言えよう。

先生の授業そのものについて、筆者は多くを知らない。ただ、本学が授業

評価アンケートを制度として始める以前から、学生に授業の点数をつけさせるなど、先駆的な試みをされたと伺っている。

なぜかゼミの最中に教員の話になった時に、ある学生が言った。「植田先生の専攻英語は厳しいからと言うので、3階程の講読では避ける学生もいた。自分は先生の授業を取り、4階程の授業でその学生と再会したら、力の付き方が全然違っていた」。「厳しい」とは、そのような意味だったのであろう。

学内運営については、言うべきことは公に意見を開陳し、筋を通す立場を取り続けた。会議での先生の大喝は、今となっては懐かしくさえ思われる。教授会などで厳しい発言をした後に、フォローして回ると伝え聞いたこともあった。そこまでしなくてもと思ったものだが、遠慮して大人ぶる態度をよしとしなかったのは、やはり先生だと言わなければならない。ただ、当時の本学には、ある意味、仲間同士で吹きさらしといった雰囲気が残っており、多少きついことを言っても正論は通るものだという信念をお持ちだったからでもあろう。この点でも、先生は良い時期に居合わせることができたように思われる。

そんな先生を見るうちに、ああ、これは「父親の立ち位置」だな、と思うようになった。抛るべき規範を示して周囲を善導しようと努める姿は、一昔前の父親像そのものである。それは、授業について記したように、ある種の敬遠を招くことがあったかも知れない。他方、どこまで言ったら逆鱗に触れることになるのかと傍迷惑な間合いを取ることもあった筆者には、多分に甘えがあったと言わざるを得ないが、これは別の話である。

「送る」と題したが、先生には今しばらく、いくつかの授業担当をお願いしなければならない状況である。今年度の新型コロナウイルス流行に際しては、オンライン授業にも取り組んでいただいた。あまり御負担をお掛けしたくはないのだが、やはり先生には、まだまだお元気なところを見せていただきたい。